

深江物語 (10)

深江の旧国道(新道)の家並みや店舗

深江塾 森口健一

東町の家並み

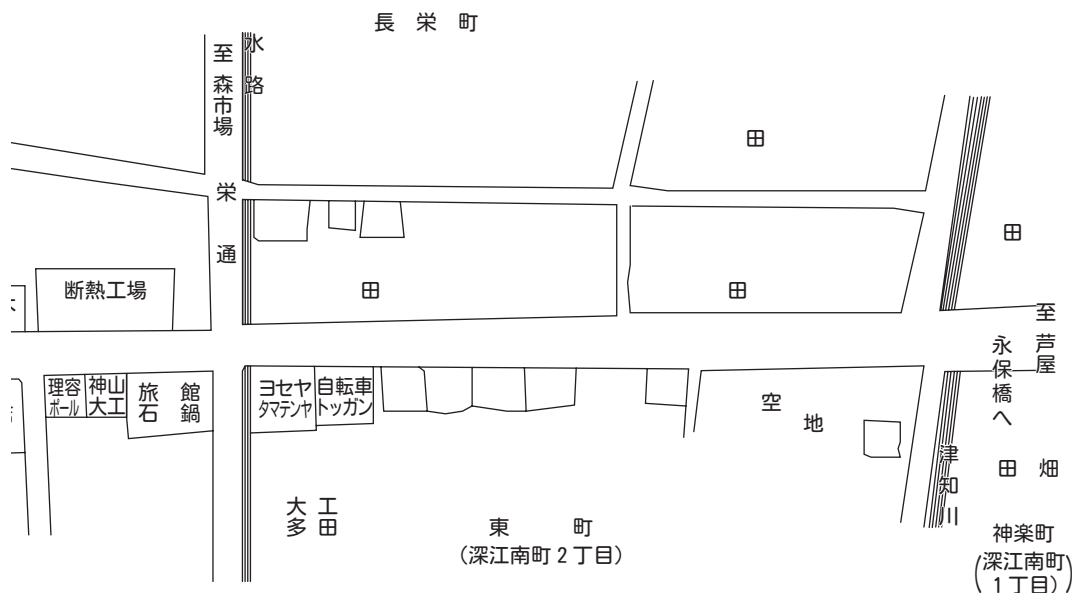
昭和二十年年代の後半から同三十年年代の深江を東西に通っていた、いわゆる旧国道(新道)を東から西に歩いてみる。

芦屋方面から深江に入ると南に神楽町(現・深江南町一丁目)、北側が永江町(現・深江本町一丁目)である。新道の北側の永江町(現・深江本町一丁目)には畑と田が混在して広がっていた。新道に沿って東西に水路が西にむかって流れ、淀みには「あかはら」と地元の子どもがよぶ「イモリ」が水底をもそもそと動いていた。この水路の源は阪神電車軌道の北にある通称「皿池」(現・宝ヶ池)である。

神楽町を南に見て津知川を越えると東町(現・深江南町二丁目)に入る。新道の北側は長栄町(現・深江本町二丁目)で新道に沿って北に水田が広がり、初夏から夏にかけてはカエルの合唱が聞かれた。

南側には見附町(現・深江南町三丁目)との境界までの一帯に二〇戸ほどの住宅が密集していた。この住宅については、「住んでおられる方の多くは終戦前後(昭和二十年前後)に四国方面からやってきた人たちであると聞いている」と、この住宅のそばに住んでおられた姫路西高校の英語教師をされていた足立先生(名前は未詳)のご家族から昭和三十年代半ばに聞いた。

これらの住宅が新道に沿って東西にならんでいるうち、交差点から東に二軒目に通称「トッカン」という男性が自転車屋を営んでいた。新品の自転車は殆どなく中古品の黒い自転車が並んで売られていた。



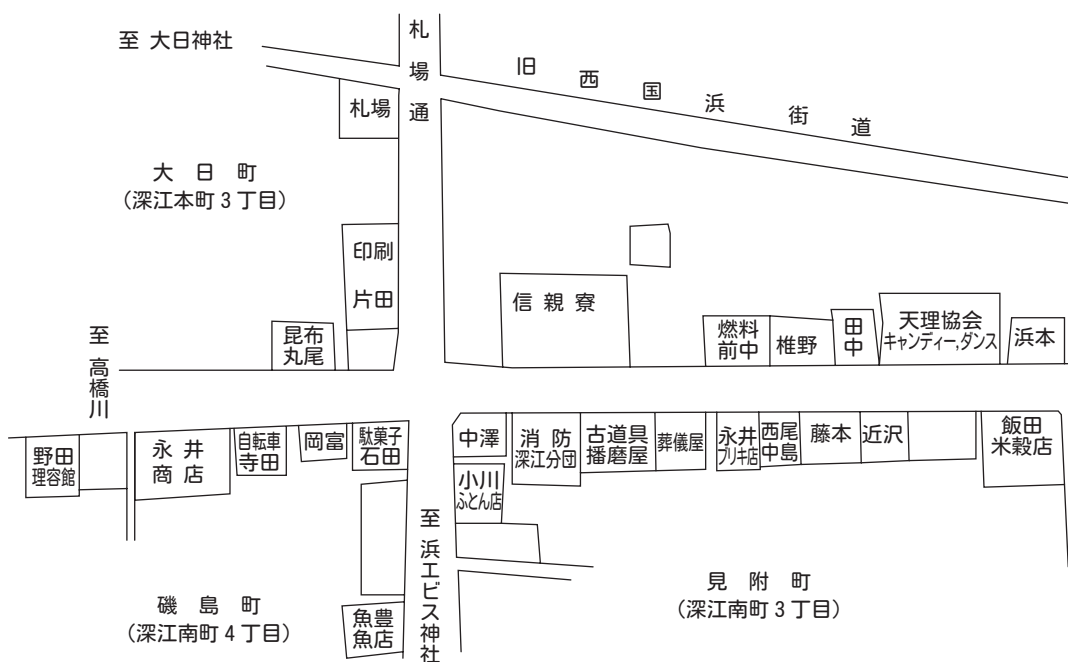
昭和20年代の「新道」

深江南町2～4丁目沿い



写真1 昭和29年航空写真 札幌通～栄町

日常はパンク修理などがおもな仕事で修理に使用する「ゴム糊」の匂いにつられて子ども達がよく店を覗いていた。
自転車屋の西隣が「よせや」である。今日の廃品回収の店である。



昭和29年の航空写真などを参考に藤本吉江氏より聞き取りを基に作成 平成30年9月

店は土間で奥のほうには銅線の巻いたもの、錆の付いた鉄製品が積み上げられている。子どもたちは何日もかけて集めた金属類をこの店に持ち込んで買い取ってもらっていた。子ども達にとってはささやかではあるが「お小遣い」になった。ちなみに銅は「アカ」といい、買い取り値段は銅、真鍮、アルミの順であった。子ども達は「アカ、シンチュウ、ボロ（アルミ）」などといった。くず鉄や銅などがこのような店で子供たちからでも買い取るとる背景には、昭和二十年後半の朝鮮半島における動乱（戦争）があった。軍需製品のために金属類が高騰したためである。

この店の名前は不明であるが、子供は「テンヤ」と呼んでいた。この店にかぎらず古物を集めて廻る人を大人はタマテン屋といった。この店も古物を取り扱っていたから店も「タマテン屋」といったようである。子ども達は「タマテン」の一部から下の「テン」だけと呼んだのである。「タマテン屋」の名の由来は、古物を店で買い取らず地域を廻って各家庭から買い取っていくときの呼び声が「タマテンか?」「タマテンか?」といったためである。「古物が溜まっていけないか」という意味である。今では「家電の回収車です」とスピーカーでまわっている。この頃は車ではなく自転車であったという違いだけであろう。

見附町の家並み

南北のとおりを西に進む。森市場（現・サテイ）の方から流れてくる水路のある道を渡ると見附町（現・深江南町三丁目）になる。

道路西角に、「ホワイト」という喫茶店があった。この喫茶店の営業の始まりや閉店廃業時期についてはその名だけで詳細は分からない。深江の新道沿いにあった唯一の喫茶店であった。店の名のとおり屋根をのぞいて建物全体が白くペンキ塗りであったため人の記憶に残っていたのであろう。

喫茶店の西隣に旅館「石鍋」があった。旅館と言うものの大きな

看板を上げているわけではない。利用者は「西国三十三箇所めぐり」の巡礼者、お遍路さんであったという。そのためか地元の人でもその旅館の存在や内容を知る人は殆どいない。

旅館に並んで「神山大工」の店。この家は大工の仕事と農家の兼業で、店とはいうものの看板などは上げていなかった。

農業は神楽町（現・深江南町二丁目）の岡田家の土地を利用（借り）しての農業である。この岡田家の農地は現在では「神戸市深江南住宅」の敷地となっている。

「神山大工」道角に理髪店。看板は「ポール理容所」と掲げてある（写真2）。店内には理容椅子が二セットあったが、仕事は店主一人であった。この店の利用者はポール理容所とはあまり呼ぶ事はなく、店の主人の「山根」の



写真2 ポール理容所（飯田春美氏提供）

姓で「山根の散髪屋」といつていた。人によればこの主人は「気難しい人」で利用者の評判は好悪に分かれたという。

この理髪店の西の南北の道を渡ると、「飯田米穀店」である。新道沿いの家屋としてはかなり大きい。店は新道に面して開いている。店内には奥に天井まで届くほどの金属製の大きな

きな精米機があるのが印象的であった。この飯田家は、深江では有数の大きな地主の一つで、一族縁者が見附町（現・深江南町三丁目）の海岸近くにあった「深江魚市場」を創設されたことでも知られる。魚市場は「飯田の魚市場」とも言われていた。

飯田米穀店の西側に家屋に沿って小さな南北に流れる水路があった。水源は不明であるが、きれいな水で近所の人は時期が来れば「障子洗い」をこの水路で行っていた。戦後まもなく水路は暗渠になったのか廃止されたのか、今では家並みの中に消えている。

更に道に沿って西には「極楽寺」、「近澤」、「藤本」、「西尾・中島」と民家が並ぶ。民家の並ぶ西の先に「永井ブリキ店」。この店は国道四三号線が完成してから営業を続けていた数少ない店でもある。近隣の工場からの発注をもとに、手作業で「樋」「ダクト」などを製作していた。

ブリキ店の西隣に「葬儀屋」と近所の人が呼ぶ家屋があった。店の名前も不明で詳しい業務は近隣の人にも分からない。ただ薄暗い店の奥には葬儀に使う「檜」がいつも数組置いてあった。それで葬儀屋と人は呼んだ。

「葬儀屋」の西が「播磨屋」という古道具店。店の中には鍋、釜などの日常生活用品から手作業用の農機具までが並べられている。一見すると雑然と積み上げられているようではあるが、それなりに商品がグループ分けされているようではある。

この店が地元で知られるようになったのは映画の撮影に使われたことによる。昭和三十一年のことである。映画は谷崎潤一郎の小説「猫と庄三と二人の女」を原作とする同名の映画である。原作では「庄三」の店は芦屋・打出の「荒物店」となっている。庄三には森繁久弥、二人の女のうちの前妻に山田五十鈴、後妻には香川京子が扮した。どれほどの頻度でこの「播磨屋」がロケに使われたのか定かではないが、

撮影があるたびに人々は群がって見学していたそうである。おそらく深江では初めての映画撮影であり複数のスターがこの地にやってきたから人々が関心を寄せたのは自然である。映画の配給会社は「東宝」であった。

「播磨屋」に並んで西に「深江消防団」の屯所がある。昭和二十年代の屯所は今と違って木造二階建ての付

近の民家と大きな違いはなかった。消防団の建物と分かるのは、家屋のそばに鉄骨の「火の見櫓」と呼ばれた塔が立っていたからである（写真3）。

「火の見櫓」の頂上には、屋根がついた台があり、その屋根の下に釣り鐘がぶら下がっている（写真4）。この釣り鐘は、現在史料館に展示されている。地区で火災があれば、消防団員が鉄塔についたはしご

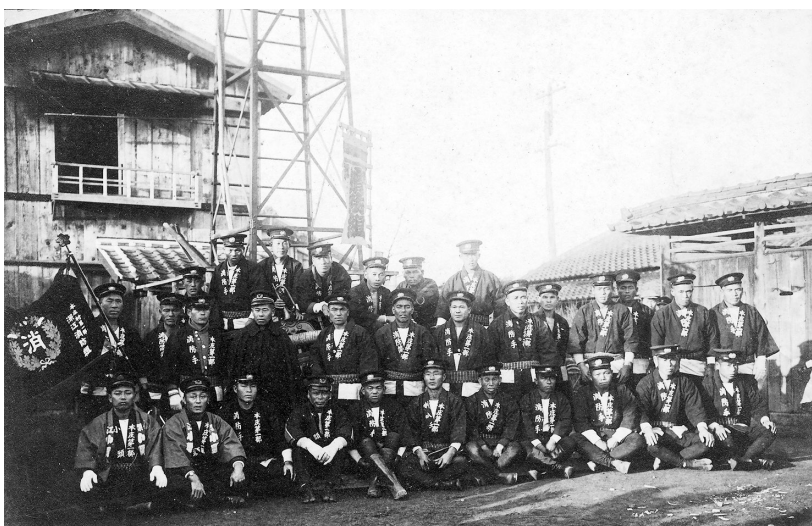


写真3 火の見やぐら前での深江消防組



写真4 火の見櫓 (飯田春美氏提供)

を駆け上がり、木槌で鐘を打ち鳴らす。遠くであれば「カーン、カーン、カーン」と緩やかにうつ。ちょうど人が数字を数えるのに「いち、に、さん」と口に出す程度の速さであろうか。火の手が近ければ「カンカンカン」と隙間なく連続に打ち鳴らされる。早鐘である。早鐘が鳴れば地元の人は家をでて火元を探る。戦後の早鐘で多くの人の記憶に残っているのは、新道沿いにあった「天理教」の道場が全焼したときであろう(後述)。消防団は、深江が神戸市に合併されるまでは深江村の団であった。団員はもちろん近所に住む深江の村人で構成されていた。毎年正月には団員が深江の町を廻って「寄付金」を集めていたが、昭和の終わりがちになって、当時の財産区の会長の判断により寄付金集めは休止された。その代わり、深江財産区から相応の金銭が支給されるようになった。それに伴い、地域の安全を守る消防団の団長は深江財産区のメンバーとしても参加するようになった。消防団屯所の少し南に「小川ふとん店」があった。今ではふとん店とい



写真5 小川ふとん店 (藤本吉江氏提供)



写真6 小川ふとん店から石田の菓子屋を見る (藤本吉江氏提供)

うよりリフォームやインテリアを行う工務店のような店になっている。この付近では最も古い店の一つで、店構えも大きなものである(写真5)。店は自家用トラックを持っていた(写真6)今では布団は羽毛や化学繊維のものも増えている。昭和時代では布団といえば綿入りの製品しかなかった。綿入りの布団は季節ごとに綿を手入れする必要がある。手入れは「綿の打ち直し」という作業で、たいいてい家庭は「布団店」でそれをしてもらっていた。「小川ふとん店」のおもな営業は布団のうち直しであったようである。

札場通と新道が交差する西北角に子ども達が「石田の菓子屋」と呼ぶ駄菓子屋さんがあった。店の中は広いけれど薄暗い。広い土間の中央に菓子類を入れた二層四方ほどのガラス張りのケースが並んだ台がおいである。台の奥には入口に向かって、玩具類がぶら下げ付けられた板が立ててあった。駄菓子屋は深江南地区ではこの「石田」と東町(現・深江南町二丁目)の「カタオカ」という二軒しかなかった。駄菓子屋は地域の子ども達の社交場でもあった。駄菓子屋さんは、菓



写真7 野田家の葬儀の車列 昭和36年6月18日（野田正雄提供）



写真8 昭和34年の永井彦右衛門商店

子、玩具を季節によって少しずつ変化をもたせていた。子ども達は店をのぞき、並べられている商品によってその遊びに変化をつけていた。年末には飴やコマ、春以後はビー玉（ラムネ）、メンコ（ベッタン）。夏になればサイダー、ラムネ、アップル（リンゴ味の飲料）、虫取り網や竹製の虫カゴである。

駄菓子屋さん「石田」の西隣が岡田さんで、屋号は「岡富（おかとみ）」である。荒物を取り扱っていて鍋、釜、火鉢、干物用の網などを扱っていた。この店のご主人

は「御詠歌」の元締め、導師として知られていた。

「岡富（おかとみ）」の西に「寺田自転車店」。この自転車店は大日神社近くの「西澤自転車店」と並んで新品の自転車を多く置いていた。寺田自転車店の西が「永井商店」（写真7、8）。この店の経営者である永井氏も近隣有数の土地持ちであったという。平成の今は、昭和の時代の店構えの面影はなく、同じ場所には同家の経営する通称「永井のマンション」が建っている。

永井のマンションの通りを挟んで西に「野田理容館」（写真9）がある。野田理容館は初代の野田正蔵氏が戦後まもなく開業し、令和の今は三代目となる。

店は二代目に移ったところ、国道四三号線の用地買収や工事に伴い場所が少し北に移動した。更に三代目になった店は、前面がガラス張りで洋風の構えとなってその名もフランス語を使ったものとなった。この店は幾つかある理容店でも戦後から今まで続く数少ない店でもある。



写真9 野田理容館

新道の北側の家並み

先に書いた「おかとみさん」から新道を挟んで北側に「布施タバコ店」。店ではタバコを販売していたが、この店は「昆布」の行商で知られていた。布施タバコ店を東に向かうと片田家が札幌通りに面しており、通りの東に「信親寮」があった。木造二階建てである。寮は深江の稲荷筋にも同名の寮があった。稲荷筋の寮と同じく深江浜にある現在の新明和工業（旧川西航空機甲南工場）の社宅であった。建物配置は稲荷筋の寮とほぼ同じで札幌通りに向かって「コ」の字型に立てられている。場所は現在の国道四三号線大日交差点の国道中央になる。

稲荷筋の寮は現在のコープ深江店ができる昭和三十六年まであったが、こちらの寮は、昭和三十年はじめて国道四三号線の工事に伴いとり壊された。寮は昭和二十年の空襲によって西側の一部が焼けていた。この建物には戦災で焼け出された家族の幾組かが住んでいた。その住民のなかには一室をベニヤ板で区切って二戸として住んでいた家族もあった。国道四三号線工事に伴い寮に住んでいた人々は、代替住宅として神戸市営住宅が提供された。その市営住宅は見附町に新築されて木造平屋の二戸または四戸連棟の住宅である。

その市営住宅も一〇年あまりで取り壊された。敷地の一部が神戸市の「深江南老人いこいの家」を経て「深江南地域福祉センター」となった。「深江南地域福祉センター」として今では地域の人々の老若男女が様々な活動に利用しているけれど、この敷地がかつての戦災の痕跡を引き継いだ歴史を持っていることを知る人は殆どいない。

信親寮の東に炭燃料を扱う屋号が「丸吉（まるよし）」という店。経営者は古くからの深江の住民で前中さんである。この店は特段大きなものではなかったが、昭和三十年台初めにこの近隣では二番目に置かれた電話があった。最初に電話が置かれた店は新道南にある「飯田米穀店」であった。

青少年や子供のために

燃料店から二軒おいた隣に天理教の教会があった。教会を運営されていたのは、深江で古くからある椎野家である。椎野家は、深江では古い家柄の一つであるとともに地主でもあった。たとえば、現在の神戸大学海事学部のある付近の土地も、椎野家の所有地であった。この土地は高橋川の北にあって川面よりかなり低い土地であり、いわゆる「ふけた」で使い物にならない土地であった。二東三文で処分したものである。また、現在の芦屋カントリーの敷地になっている土地の一部も同家の所有地であった。

現在の当主は椎野義弘氏である。以下は椎野義弘氏から平成二十八年九月に筆者が聞き取りした話をもとにまとめたものである。

昭和二十四年から二十五年というわずか一年間であったが、天理教教会の中にダンス練習場を作った。その広さは畳二〇畳ほどの板張りで素足で踊るため床を磨き上げた。普段は礼拝場として利用されているが、礼拝の終わった夕刻から数時間を地域の若者のために開放したのである。

ダンスミュージックは椎野家にあった蓄音機から新たに購入したスピーカーを通してながした。ダンスの教授は椎野芳雄氏である。氏は「モダンボーイ」として神戸の繁華街で少しは知られた人であった。ビリヤードの名手でもありそのころに行われたビリヤードの全国大会にも出場した。多少自己流ではあるが教えたのである。教会をダンスホールとして開放し、自ら参加者に手をとって教えたのは氏の地域への貢献の手段でもあった。同時に天理教の教えにも沿うものであった。

終戦から三年ほどしかたっていない。そのころ、とくに若者の心は決して平穏ではなかったようである。教会の礼拝場を開放したのは、深江の若者が「グレる」ことがないように、あるいは健全な男女の交流のきっかけになるようにとの思いで芳雄氏の思いがあった。

昭和二十年代半ば以降から、ダンスは若者の間では一つの流行でありファッションにもなった。大学生の間では自らダンスパーティを企画することもしばしばみられるようになった。それらのパーティは若い男女の出会いの場にもなったが、大人たちの目には決して善きものとは映らなかったようである。教会をダンスのために開放することはわずか一年で終わってしまったのはそのような世間の目もあったせいかもしれない。

天理教の教会の西に椎野家の住まいがあった。住まいの南が新道に面している。ここで椎野家はアイスクャンデーの製造販売を終戦後すぐに始めた。一馬力のモーター付きの製造機を購入し、店先で製造し販売した。通りからはアイスクャンデーが作られている様子が見えた。一坪四方ばかりの鉄板にアイスクャンデーの大きさの穴がずらりと並び、その穴が一本一本のキャンデーになった。昭和二十四年当時アイスクャンデーは一本三円で、昭和二十五年以降は五円になった。

飛ぶように売れて夏の二カ月の売り上げで一年分の生活費がまかなえたというほどであった。アイスクャンデーの季節には少し早い時期、「卯の花祭り」（大日神社例大祭、いわゆる深江の祭り）にはキャンデーを作り、貯蔵して子供たちに無料で配ったので大喜びされた。

子どもが喜んだといえば、アイスクャンデーの製造販売以外に子供向けの「貸自転車」、今でいうなら自転車のレンタルを営んでいた。レンタルサイクルは、今日では観光地に行けば時折みられるが、都会に近い深江にもあったというのは時代のせいであろうか。戦後間もないころゆえに、自転車といえども子供の遊び用に自転車というのは贅品であったのだ。大いに繁盛したという。

大人用自転車であれば二〇センチ以上であるけれど、子供向けだから一二センチから一八センチの自転車を中心であった。自転車だけでなくより小さい子供向けに「足ふみスクーター」というものもあった。キックスケー

ターとも呼んだ。

昭和二十九年十月十四日の深夜三時、天理教の教会や民家が全焼した。深江消防団の屯所にある火の見櫓から早鐘が打ち鳴らされた。人々は深夜にもかかわらず何事かと寝床から飛び起きて外に出た。

教会付近は、かつての空襲を思わせるように夜空を明るく赤く染めて燃え盛っていた。この火事は、人によれば昭和二十年八月の空襲以外では一番大きな火事であったという。

現場検証の結果は、いわゆる火の不始末ということであった。現場検証はひどく簡単に終わったことに教会の人はやや不満と不信感を持ったという。そのせいもあって永らく「あの火事は放火であった」というわさが付きまとい続けた。

火事から数年後、新道は拡張され国道四三号線となり、教会も国道の北の現在地に移転した。教会の火事のこと、ダンスホールのこと、新道が消えて国道四三号線完成とともに地域の人の記憶からも消えてしまった。

本稿は、平成三十年から平成三十一年にかけて、深江生まれ深江育ちの藤本吉江さん（昭和十年生）、大西令子さん（昭和十年生）、野田正雄さん（昭和二十年生）、谷岡尚武さん（昭和二十年生）、新田誠さん（昭和二十五年生）から森口健一が聞き取った内容である。飯田一雄、松下芳子、増田行雄ら深江塾のメンバーの意見を聞きながら文章化、大国正美が修正したものです。